寄　書

『わたしの日韓関係史』（下）

"My Relationship to Japan and Korea", No. 2

木屋　隆安*

5．『よど号』事件余話

すでに18年以上の歳月が流れ去ったが，あの日航機『よど号』ハイジャック事件が起きた時，韓国では故朴正熙（パク・チョンヒ）大統領自らが指揮して，なんとか金浦（キムポ）空港内で『よど号』を解放しようと必死の努力をした．しかし犯人たちはアメリカの星条旗を見つけて，そこがピョンヤンでないことを知り，彼らは『北』へ飛び去った．ピョンヤンはハイジャッカーらの"亡命"を認めるとともに，人質と乗員，機体を還（かえ）した．

わが国のマスコミはあげて『金日成（キム・イルソン）主席の好意』なるものを"必要以上"にあげつらい，まるで"救世主（メシア）"扱いだった．リビアのカダフィ大佐と同じことをやっただけなのに，とにかく随喜の涙をこぼして感謝した．私は当時，時事通信社の社会部長をやっていたが，出先（警察庁や外務省）から送られてくる「金日成主席の忘れ得ぬ好意に深謝する」旨の原稿に胸がムカムカした．とうとう出先に「なんでそんなに金日成の提灯（ちょうちん）持ちをしなきゃあならねえんだ！　われわれがほんとうに感謝しなきゃあならねえのは韓国のほうなんだよ，朴大統領だよ，韓国朝野人士なんだよ！　そういう原稿を送ってこいよ，バカモン！」と，ドナリつけた．しかし，ついに私が期待した記事は送られてこなかった．

私は憤まんやるせなく，友人の韓国有力紙『中央日報』の特派員姜（カン）範錫さん（のち駐日公使）に，「もしよかったら使ってください．今回の『よど号』事件に関してお国の方々に"ありがとうございました"と，お礼がいいたいのです」といって原稿を渡した．

ほどなく拙（せつ）文が活字になった．ハングルが読めない私にもよくわかるように翻訳されていた．それから間もなくのことだ．会社や私の家あてに50通近い"心あたたまる"手紙をもらった．私はむしろ面はゆい，テレ臭い気持ちだった．日本語で書かれた手紙には，丁重に日本語で礼状をしたためた．

それらの手紙の中に，政府機関に勤めている梨花大出のお嬢さんのがあった．「目下日本語を勉強中」とあって，文章そのものはたどたどしかったが，意味は全部わかった．3，4度文通しているうち，突然彼女から「このたびコンピュータ技術修得のため，お国に派遣されることになりました．お会いできる日を楽しみにしています」ということを書いたエア・メールが舞い込んだ．

私は東京や日高（旧高麗川（こまがわ））あたりを車で案内するスケジュールをたて，彼女の来日を待った．ところが，私にとって生涯忘れられぬ"異変"が起こったのである．時事通信社に"赤色革命"ともみられる労働争議が起き，過激派労組との共闘

*㈱中外ニュース社専務取締役、主筆

した一部職制によって，創業者長谷川才次社長が追放され，ついで私など社長支持派が追放されたのである．まるで啄木がうたった「石をもて追わるるごとく」に…….

長谷川さんの“独裁的な労務政策”は決して“良かった”とは今でも思っていない．社側の団体交渉委員に任命された私は，“妥協すべきは妥協する”姿勢で組合側に接した．長谷川さんに『貴様のような軟弱なやつは！』と局部長会議の席上で面罵されたこともままあった．「団体交渉委員には“当事者能力”を必要とします．私が組合と合意に達した事項を社長が否決されるなら，直ちに私を罷免して下さい．私には到底団体交渉委員はつとまりません」と，あらがったが，長谷川さんは「全役員連袂辞職」の挙に出た．“落ちる太陽”を戻すことはできなかったのだ．

私は長谷川さんを偲びながら，わが国では反共月刊誌として有名な『ゼンボウ』に，昭和54年3月号まで18回にわたって『小説時事通信』を連載させてもらった．そしてそれをかなり手直しして，その年の秋『実録時事通信』として同社から出版した．新生時事通信側からは，抗議も訴えもなかった．

そんなわけで，トラブルの真っ最中だったゆえ，とうとうその韓国のお嬢さんにはお目にかかることも，お話することもできずじまいだった．きっと彼女は時事通信に私を訪ねてきたろうが，“古い長谷川政権時代に組合を弾圧した中心人物”と目されていた私だから，彼女に対する応対はさぞや冷ややかだったことだろう…….

ちょうど15年前，私は招かれて韓国を訪問した．彼女の姓名も，勤めていたお役所も，梨花大学卒業生であることも全部わかっていたので，〈会えるかもしれない〉と思って，お土産まで用意したが，やはり会うことはできなかった．それは友人の金定漢君が「捜し出すことは可能だが，もうその女性はお嫁にいってますよ．わが国は日本とは比較にならぬくらい女性には儒教精神が旺盛です．その人に会うのはおやめなさい」と，忠告（警告）してくれたからだ．当時，私はもう50を過ぎた初老の男．色恋抜きでその女性と会いたかったのだが，ついに果たせなかた．

6．サイデンステッカー教授の忠告

実は，私は現在『思想新聞』に『双子のドラゴン』なる古代日韓関係史を連載させてもらっている．最初はわが国に対する“元寇”に反対して，自分たちの国王・高麗忠烈王にも背き，ついに済州島で全滅した“抗蒙義軍三別抄”を主題にするつもりだったが，毎日新聞の連載小説『蒙古襲来』が，結構詳しく“三別抄”を書いていたのでやめにし，発想を変えて日韓両国の“同祖史論”を書いている．この原稿を書いている時点で，すでに35回を書き終えた．あと残すは15回のみだが，まだ“ナゾの世紀”といわれる4世紀の日韓関係史に首を突っ込んでいる．1回400字詰め7枚だが，高麗時代の大きな出来事『刀伊の賊』と『三別抄』まで言及し，日韓両国が『双子のドラゴン』であるゆえんを述べて責めをふさぎたいと思っている．

史論はどうしても専門的になるので，読者の“眠り薬”になりかねない．そこで文中に現代史をも含めた興味あるエピソードを交えて，読者の眠りたくなる目を開けさせる工夫をこらさねばならぬ．そんなわけで，『双子のドラゴン』の記述との重複を避けながら筆を運んでゆかなければならないので，かなり苦労する．しかも拙著『「日本史」異議あり！』や『古事記おもしろ読本』とのかかわりも考えねばならないので…….

それはともかく，日本人は2回も韓国の国母殺害の大罪を犯している．閔中殿と陸英修大統領夫人である．陸夫人の場合，犯人は韓国人だったが，日本語しかできない大阪育ちの男である．四捨五入すれば日本人になる．そんなことを思うと，申し訳なさとでもいおうか，胸がキリキリとうずく．

昭和44年晩秋の昼下がりだった．当時は時事通信の前橋（群馬）支局長をしていたが，渋川という上越線の田舎駅の道向こうのビアホールで，1人のアメリカ人にさんざん毒つかれていた．その人は当時米スタンフォード大学の教授，サイデンステッカーさん．彼は私にしゃべらせずに流れるような日本語で顔を真っ赤にして，まくし立てた．私をにらみすえながら．

「はっきりいうが，私はあなた方日本人より韓国人のほうが数倍も好きだ．とにかく多くの人とつき合って，そういう気持ちになってしまったの

だ．あなた方はハナもちならないよ，あなたも含めて……」．

「お尋ねするが，あなた方日本人に韓国語を話す人間が何人いる？　ほとんどいないだろう．自分たちに文化をおしみなく与えてくれた韓国人を今では蔑視し切っている．今に見ていろ，日本は必ず韓国にすべての面で追い抜かれるから……．あなたに聞くが，韓国語をやる気があるかないか？　ナニ？　『今はないって？』，賭けてもよいが，あなたは生涯韓国語の勉強はしないよ．あのハングルを覚えれば，たとえ韓国語はしゃべれなくても新聞や本は読めるようになる．ハングルとイロハを対比させれば韓国語は簡単に読めるんだ．それすらあなた方はしようとしない．私はねえ，今では日本語も韓国語も自由にしゃべれますよ．日本人は英語もできなければ，隣国の言葉も勉強しようとしない．そのくせ中国語には興味を持っている．潜在的な宗主国に対する“朝貢国”的意識，劣等感の現れとでも申しますかな……」．

随分手厳しい批判だったが，確かにそうなのだから私は返す言葉もなく，うなだれたままだった．やがて汽車がきて，彼は乗り込んだが，別れぎわ，

「私は間違ったことはいわなかったと思う．どうかあなたも謙虚な気持ちになって，私のいったことを噛みしめてもらいたい」

といった．私は彼のいったことを，昨日のように今もって覚えている．しかし彼の忠告に従うにはチャンスがなさすぎた．彼と別れて間もなく私はモスクワ特派員の内示を受け，独学でロシア語の特訓をやりだした．5年間のシベリア抑留の時，いわれなき戦犯容疑者のラク印を押されたのがたたったのか，新橋のロシア・バーで知り合ったソ連大使館員に言いたい放題あの国と共産主義の悪口をいったのが忌諱にふれたのか，それらのチャンポンかは知らぬが，“ペルソナ・ノン・グラータ（好ましからざる人物）”として，ついにビザは発給されなかった．忘れかけていたロシア語を半年も特訓したのに，今では完全に忘れてしまった．〈あの時，サイデンステッカー氏の忠告をいれ，韓国語をやっていたらなあ……〉と，悔んでいるきょうこのごろである．

しかし，牛歩ではあるが，古代朝鮮語だけはうまずたゆまず勉強している．それはわが国最古の書物『古事記』の意味不明な個所を解読するためである．お陰で『古事記おもしろ読本』を1冊モノにすることはできたが……．でも，目的が目的だけに，サイデンステッカーさんの忠告に従ったことにはならないようだ．

その本を書き始めたころ，韓国語を自由にこなす美しい中年の日本女性と知り会った．彼女は“色鍋島”という陶磁器を売る会社の女社長だったが，自分でもカマを持って焼いていた．なぜ彼女が韓国語を勉強したかというと，「私どもの陶磁器の故郷は韓国でございましょう．どうしても行く機会が多ございます．そのためには韓国の言葉を勉強しなければ，陶磁器の深味に達することはできませんのよ」というにあった．頭が下がった．

7．ボツにした『韓国の友に訴える』

私の文箱に，活字にしなかった原稿が残っている．昭和57年11月14日（日）に書き終えた原稿用紙400字詰め30枚の『韓国の友に訴える』という論文だ．読み直して〈これはボツにしたほうがよい〉と判断したのだろう．今，再読してみて，5年近くも経ているのに，日韓両国の関係はちっともよくなっていないことに気づいた．これを今一度活字にして江湖の判断にゆだねるのもあながち無益ではないと思った……．長文なのでダイジェストにする．

7.1　最も嫌いな国との“経済協力”

昔，私が習った小学校の読本（もちろん国定）に，こんな意味の詩が載っていたのを思い出す．

――かわいいミケ（猫）だなと思って頭をなでると，ミケはのどをごろごろと鳴らせながらひざの上にあがってきて，そのまま寝込んでしまう．

――こいつ，にくらしい犬だなと思って小屋のわきをよけて通ると，なにもしないのにいきなりほえてくる．全くにくらしい犬だ．

――このように心で思うことは，敏感に相手の心に伝わってくるもの．だから人や動物に接する時は，決して心の中に相手に対するわだかまりを持ってはならない――．

私は，現在のわが国と隣邦韓国の関係が，ちょうどこの詩の“教訓”を，お互いが意識しながら逆行しているように思えてならぬ．とくに“教科書”問題が，マスメディアの“歴史的大誤報”で

外交問題に発展してからというものは，この“教訓の逆行”はボルテージがあがる一方だ．その例証として，両国の有力マスメディアの相手に対する“意識調査”を挙げよう．

ソウルの夕刊紙『京郷新聞』は，10月6日，創刊36周年記念として実施した“国民意識調査”の結果を次のように発表した．この世論調査（9月10～13日）は，教科書問題が起きたあと，韓国のマスメディアが初めて行ったもので，日本に対する国民感情が極度に悪くなっていることを示している．

――対外関係の部分をみると，『好ましい友邦』および『友邦』と考える外国としてはアメリカ86.4％で，圧倒的に好感を得ているほか，台湾76.9％，カナダ70.0％が上位を占めているのに対し，日本は北鮮やソ連より低い10.4％だった．これは1年前の15.8％を大きく下回っている．しかし日本については「友邦だが，好ましい友邦ではない」とする“付帯評価”が54.2％もついていた．いうなれば韓国にとって日本は“リラクタント・アライ（嫌々ながらの盟邦）”なのである．

韓国人の心の中には〈日本は韓国動乱の特需で復興のきっかけをつかみ，今ではGNP世界第2位の経済大国にのし上がっていながら，共産主義の防波堤になっている韓国に思いを感じていないどころか，さげすんでさえいる〉という“一面真実，一面思いすごし”のジェラシーのような感情が潜在している．だから「日本が教科書を是正しない場合は，国交断絶のような強硬措置をとる」については，賛成意見が63.7％を占め，反対はわずか12.8％に過ぎなかった．

このように韓国では，国民の“反日コンセンサス”はすでに定着している．教科書問題は，その反日コンセンサスをいっそう強固にする“大きな媒体”の役目を果たしたといえよう．かつて園田外相が「わが国に金を貸してくれとネダッているほうが，借金額60億ドルはビター文もまけない，と居丈高な態度をとるのはいかがなものか．話は逆ではないのか」と述懐したことがあるが，韓国のこの“一見不遜（ふそん）にみえる態度”は，彼らの国民感情からすれば，なんら矛盾はしていない．

日本からすれば，韓国への経済援助――60億ドルから40億ドルに引き下げてもらうためにかなりの努力を要した――が，彼らからすれば，それは“日韓互助互恵の対等な経済協力（援助ではない）”なのである．だからこそ（当時の）第一野党・民韓党の許景九議員は「民族的自尊に照らし40億ドルの対日経済協力は放棄し，中東あるいはECなどに振り向ける用意はないか」と，金相浹首相に迫ったのだ．許提案を受けて金首相は「教科書わい曲問題が完全に妥協するまで，経済協力問題は進展しない」と答弁したのだが，かくのごとく園田外相や多くの日本人が抱く「金を借りたいほうが，借金希望額はビター文まけないという居丈高な態度」とする“韓国観”は，一切彼らには通用しない．むしろ鼻の先で笑っている．

7.2 連動した日本人の対韓意識

1億2千5百万人の日本人にも，マスメディアの論調やイデオロギーに“影響されない考えや感情”というものがある．多くの日本人は第2次世界大戦や韓国統治36年および中国大陸侵略に，大なり小なりの贖（しょく）罪感を胸中に抱いている．しかし，「子々孫々にいたるまで永久に罪の十字架を背負ってゆくべきだ」とする押しつけがましい相手国（被害国あるいは被害民族）の“いじめ”には，ある種の反発さえ覚えている．ここに時事通信が毎月行っている『時事世論調査』のデータがある．

教科書問題がまだ起こっていなかった6月中旬には，「中国を嫌いな者」は4.1％，「韓国を嫌いな者」は21.6％だった．ところが教科書問題が起きてからの中・韓両国の“逃げ道なき包囲共闘”に，ものいわぬ多くの日本人の心情には大きな変化が起きた．9月中旬の調査では「中国を嫌いな者」は8.2％，「韓国を嫌いな者」25.7％に，そして「中国が好きな者」は22.0％から16.6％に，「韓国が好きな者」は2.1％から1.0％へと低落した．

このデータで気づくことは，日本人は韓国人より，潜在的には韓国人嫌いが圧倒的に多いということである．教科書問題で中国離れが増加したとはいえ“16.6％”――国民百人のうち17人程度はプロ中国派だ．それに引き換え，韓国人に対しては，こんな問題が起きる前から日本人百人のうち2人程度がラブ・コールするだけで，“教科書”のギクシャク後は百人中わずか1人になってしまった．一方の韓国は，「日本人は大嫌い」とい

いながら，日本人に好意を持っている人は，“教科書”後も百人中10人はいる．「……国交断絶の強硬措置をとるべきだ」とか「民族的自尊に照らし対日経済協力は放棄すべきだ」という威勢のよい掛け声とは裏腹に，日本との“共存共栄”を望んでいる国民がかなりいることがよくわかる．

問題は日韓両国政府と両国マスメディアの『日韓関係』に対する対応ぶりである．“教科書”で中韓両国に執ようなゆさぶりをかけられた鈴木内閣は，“善隣友好”を第1と心がけ，“完全な内政干渉”を許すとともに，無条件降伏に近い土下座外交に終始してことの終結を図った．マスメディアの“歴史的大誤報”から生まれた“教科書”問題に，き然とした態度をとることなく，ただひたすらにもみ手にすり手のコメツキバッタ外交を展開し，ついには「政府の自主的判断で速やかに是正する」ことを中韓両国に約束した．

鈴木首相は大きな過ちを犯した．日本の教科書は，検定制度はあっても中国や韓国のような国定教科書ではない．したがって，“教科書”の政府見解は，あくまで「日本政府の自主的判断で是正のための検定は行うが，正誤訂正には応じられない」（傍点筆者）と，誠意を示しつつも行政制度上の問題にまで干渉してくる態度は，きっぱりはねつけるべきであった．しかも，嗤（わら）うべきは，中韓両国をして日本政府をキリキリ舞いさせた“教科書”問題が，わがマスメディアの怠慢と不真面目（まじめ）さがもたらした歴史的大誤報による“架空の事件”だったことが判明したのだ．その後韓国政府は39項目にのぼるわが国教科書の記述内容の修正要求がなされたが，教科書会社や文部省の自主的判断による修正と，ソウル・オリンピック開催という韓国の内的要因によって対日攻撃のホコ先は緩んだかに見えた．

8．藤尾発言で再び火を吹く

でも，韓国朝野の対日憎悪感情は，やはり“恐ろしく鋭角的”である．昭和61年10月号の『文芸春秋』に藤尾正行文相の「……合意を認めさせるための日本側の圧力はあったかも知れない．しかし，少なくとも伊藤博文の交渉相手が李朝の代表者高宗であったことだけは事実なんですから，韓国側にもやはり幾らかの責任なり，考えるべき点はあると思うんです」のくだりが，が然大問題になった．中曽根風見鶏（ウェザー・コック）首相は，“暗愚の帝王”鈴木元首相よろしく，韓国側と議論とか折衝を行うなど全くなく，藤尾文相のクビを切ってしまった．

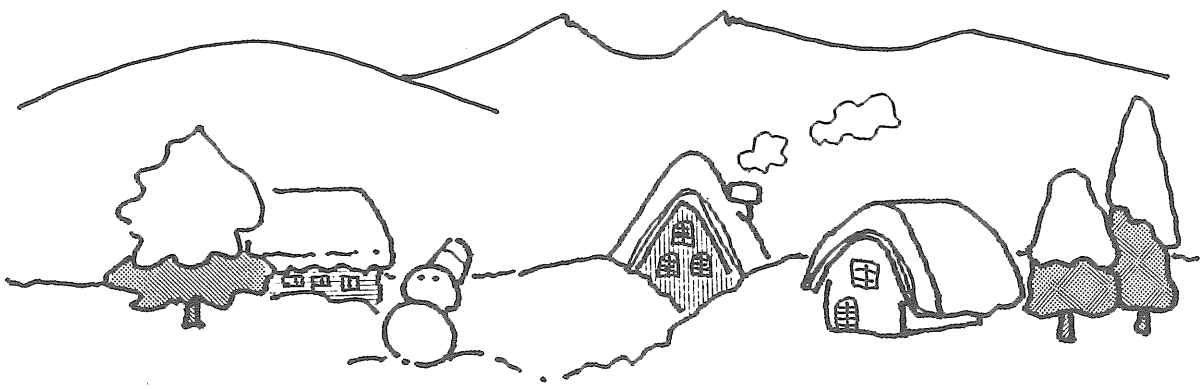
日本の新聞は「韓国さん，怒ってください」とばかり，書き立てた．最も刺激的だったのは『東京新聞』で，昨年（61年）9月6日付紙面で「藤尾文相，日韓併合を正当化，韓国側の反発必至」とやり，記事中でも「両国の合意に基づく日韓合邦である」との文言にカッコをつけて藤尾発言から引用したように見せた上，「日本の朝鮮併合を正当化している」と書いた．朝日新聞も「日本侵略論に疑問」とわき見出しにつけ，あたかも藤尾氏が「日本は侵略したのではない」といったかのような印象を与える編集ぶりだった．

しかし，『世界日報』と『サンケイ』は違っていた．前者は9月8日付で「今回の日韓合併問題にしても，藤尾文相の意見は歴史的には間違いない．正論を堂々といったわけだ．しかし，韓国から見れば別の見方が成立する」と“堂々の正論”を載せ，後者も9日付一面コラムで「藤尾発言の1から10まで100％がとんでもない見当違いとは思えない．……そのほかの藤尾発言，たとえば東京裁判や日本の外交姿勢批判にはそれなりの背景や遠因があると思うがどうだろう」と述べている．バカ・マスメディアに前記2紙のツメのアカでもせんじて飲ませてやりたいし，明らかに事前検閲をした“政府首脳”のアホさ加減にも愛想がつきたものだ．

もはや紙面もつきたので，最後に韓国の『中等国史』Ⅶ－5『大韓帝国の末路』“海牙（ヘーグ）密使事件”の項に藤尾発言の正当性を裏付けるこんな記述があることを紹介しよう．

——……オランダの首都ヘーグで，万国平和会議が開かれるのを機会に，韓国のくやしさを列強に訴え，そのちからを借りて日本の支配を脱しようと，李相高ら3人の皇帝の密使が，皇帝の親任状をもらって密行し，突然ヘーグにあらわれた．3人は皇帝の密書を提出し，会議に参席することを要求した．議長（ロシア代表）は，韓国はすでに日本の保護国になって外交権を失っており，参加する資格がないとして拒絶した．ここで密使は，日本との保護条約は全く日

本の脅迫によるもので，韓国皇帝の真意から出たものでないことを力説したが，やはり参席の許諾は得られなかった．……この密使事件が日本に知られ，日本の朝野は大いに驚き，統監伊藤博文をして韓国政府に質問を発した．伊藤はこの事実の証拠を見せ，強硬にせまったので，これに大臣たちはおそれをなし，皇帝に請うて太子の代理政治を考えたが，日本の干渉によってついに譲位することになった．こうしてこの年の8月に光武年号を改め，隆熙とし，また，ついで純宗の即位式を挙行した――.(傍点筆者)

この韓国教科書の記述をみてもわかるとおり，“藤尾発言”は歴史的には一つも間違ってはいない．李朝末期の宮廷の“行為”は，すべて“毛を吹いて傷を求める”たぐいの愚行の連発だった．というより李朝は国際世論から孤立していたのであった．しかし客観的にはそうみえても，『世界日報』の説くごとく「韓国から見れば別の見方が成立する」のである．

前述した“ボツ原稿”の末尾に9月7日付『東亜日報』の社説『日本研究の必要相手をより体系的かつ客観的に知ろう』を掲げているが，これは卓論だ．「……日本が歴史を歪(わい)曲し，憎いので，日本を相手にする必要はないとの考えが心の片隅に少しでもあるならば，それは大院君時代の鎖国心理と少しも変わらない．……ソウルから東京まで航空機でわずか2時間たらずの距離でしかない日本は，われわれがとうてい避けて通れない隣国であり，これからも相手にせざるを得ない立場に置かれている．……われわれは日本の文化・歴史などを活発に研究し，日本をより徹底的に知ることができるように集中的な努力を傾けなければならない」と．　(終わり)